

Dieu et la Destinée de l'Homme,
 Les grands problèmes de la théologie musulmane,
 Essai de théologie comparée,
 par Louis Gardet. 1967, J. Vrin, Paris

松本 耿郎

本書は L. Gardet 一人の著作であるが、一方 G. C. Anawati の Dieu, son existence et ses attributs の完成によって一対となるもので、いわば共著の一部である。本書はサブタイトルに Essai de théologie comparée とつけられているが、1948年に出版された Gardet と Anawati の共著 Introduction à la théologie musulmane の場合のように詳細なカトリック神学との比較研究はなされていない。この書の場合、キリスト教神学との比較は、イスラーム神学における種々の問題を解説したあとで、それに類似するキリスト教神学における問題に軽く言及するにとどめ、しかもそこにおける著者の論評はこうした比較神学研究のための示唆を読者に与えるという程度の記述にとめおかれている。ところで、こうしたキリスト教神学とイスラーム教神学との比較神学研究は最近盛んになってきており、本書と時を同じくして W. Sweetman の Islam and Christian Theology (Lutteworth) が出版されている。この Islam and Christian Theology は五巻よりなる労作で、神学史にも、またイスラーム哲学との関係にも触れられており非常に豊かな内容を持つ優れた作品である。

さて、Dieu et la Destinée de l'Homme において著者は神学史的観点からの研究はすでに完了したものとして、そういう観点からの記述はほとんどおこなわず、著者がイスラーム神学においてその発展のために絶えず活力を与え続けて来たと考えられるイスラーム神学における基礎的で中心的な諸問題について、イスラーム神学内における各神学者および神学諸派がいかに考えたかを、特に正統派イスラーム神学思想を中心に、またその外の思想もあわせ並列的に記述することに重点を置いている。そして、キリスト教神学との比較はこうしたイスラーム神学

における基本的問題の意味をより明確に理解するための参考として各所にさしはさまれている。

さて、本書は五つの部分に分かたれる。第一部ではイスラーム神学における人間の自由と神の能力との関係の問題について論ずる。これはアラビア語では単に *af'āluhu* (神の行為) 論と呼ばれるものであるが、それは絶対者と偶存者との関係、神慮と人間の自由な行為、神の正義と世界内での諸悪などの関係について論ずるもので、著者は始めにイスラーム神学ではそれ程問題とされない世界の創造論について述べ、次いでヘジラ紀元二世紀から五、六世紀にかけて支配的であった一瞬ごとに生じ滅する原子を最小単位とする原子論的世界観について記したあと、人間の自由な行為の創造の問題について論ずる。そして、コーランにおいて示される神が人間における様々の悪の行為の存在と対比して見られる場合、そこに神の正義と全能性とに関して生ずる矛盾をイスラームの神学者達がいかに解決していったのかを論ずる。そして、ムウタジラ神学における人間自らの行為に対する自由な主体性の存在の主張が神の全能性を損うとして、これに反対したアシュアリー神学が人間の行為の説明のために主張した *kasb* ないし *iktisāb* (獲得) の概念を解明してゆく。この問題は M. Watt の *Free will and Predestination in Early Islam* においても紹介されているが、*kasb* とは、人間の行為が人間自らその行為の創造者となることなしに、その人間に属するものであることを説明するために作られた概念である。そしてこの *kasb* は行為との直接的関係において神が人間の内に創造した *istitā'a* によって可能になる。著者は人間の行為が、先行し偶然的な意志と偶然的な能力と完遂された行為と能力と行為の間の絆という四つの要素から成り立つとした場合、*kasb* はその絆に当ると言う。正統派イスラーム神学においては行為に対する人間の能力の直接的影響の存在という考え方は極力さげねばならないものであった。したがってジュルジャーニーにおいては *agent* は偶然的な能力と産み出された結果の基体もしくは *maḥall* (場) としてしか考えられていないのである。著者はこうして自由な人間の主体性を限定するイスラーム神学における人間の行為についての考え方が、能動的二次原因を否定し、第一原因と二次原因との関係を事物に関する機会原因論的観点に還元することで、同様に人間の行為を限定するツウィングリ思想と共通していると指摘す

る。こうして、イスラーム神学における人間の行為と神との関係を明確にしたあとで、正義と不正の問題を論じる。著者はイスラームにおいては *khayr* (善), *sharr* (悪) の問題が基本的には抽象的な問題意識においてとらえられたものでなく、神聖法に照らしてある事柄が *ma' ruf* (convenable) か *munkar* (blamable) かという問題として現はれたものであることを示し、イスラーム神学における善悪論の性格の本質を究明していこうとする。そしてこの正義と不正の問題をさらに *qadar* (神慮) と *qada'* (予定) の観点から論じ、イスラーム神学における神と善・悪の関係のとらえ方をさらに明らかにしてゆく。

第二部は、*nubuwwa* (予言) の問題について論ずる。この問題はイスラームにおいては、他の啓示宗教に対して予言者ムハンマドの予言者としての正統性を論証すると言う護教論的問題として始まり、神学の中に組み入れられた。そしてこの予言の問題は正統派イスラーム神学でわアル・ガザーリーの *Iqtisād fi al-i'tiqād* に見られるように予言者を派遣することが神にとって義務ではないということの証明とムハンマドの予言者としての真实性の擁護という二つの点に重点を置く論証として発展する。この問題はイスラーム神学において絶えず推搦されて、近世の神学者ムハンマド・アブドゥの *Risalat al-tawhid* においてさえも詳しく論考されている。著者は始めにコーランとハディースに詳しく基づきながら、イスラームの予言者に対する信仰の構成要素を明らかにしてゆく。次いで神と使徒との関係が神学の各派においていかに把握されているかを詳説する。神が使徒をつかわすことは、アシュアリー派においては全く神の恩寵によるものとして考えられ、ムウタジラ派においては神にとって義務づけられたものとしてとらえられ、哲学者にとっては必然的事実として考えられている。またシーア派においては神の義務づけられた恵みとされ、マートリーディ派ではそれは神の知識と叡知に一致するものとされる。著者はこのように予言者の問題についての固々の思想体系における相異を明らかにしながら、さらに啓示の本質、奇蹟の意味、ムハンマドの予言者としての証明に関する固々の思想についても明らかにしてゆく。

第三部において、*wa'd* (約束) と *wa'id* (脅迫) の問題をあつかう。*wa'd* と *wa'id* という題目はムウタジラ神学で *mu'min* (信者) と *fasiq* (罪

人)と kâfir (不信者)の来世における運命を論ずる場合において用いられたものであるが、著者はこの表題の下に、イスラーム神学における人間存在についての基本的な考え方を明かにしようとしている。そして、キリスト教においては人間は肉体と靈魂の実体的結合者としてとらえられているのに、イスラーム神学においては、アシュアリー派の原子論的機会原因論に基づく特殊な思想を除いてアル・ガザーリーに代表されるように rūḥ(esprit) がそれ自体で人格をそなえていて、それが肉体に宿ったものとして人間を考えるという点を明確にし、こうしたイスラーム的人間像を基礎にして、イスラーム教における死の概念、死後の魂の状態、世界の終末と肉体の復活、ḥaṣhr (大召集)、さらに最後の審判と報い等の問題に関連して、人間の善行と悪行に対する神の報いの様式、改悛と予言者のとりなしの持つ意味等についてのイスラーム神学内での各種の見解について触れ、さらに来世についてのイスラーム思想、すなわち天国と地獄と a'raf (胸壁)、さらに ru'yat allah (見神)について述べて、著者はイスラーム教における終末論を明かにする。

第四部では、asma' (名称)と aḥkām (地位)の問題をとりあつかっている。この問題は神学の問題であると同様に fiqh (法学)の問題である。すなわち、mu'min (信者)と kâfir (不信者)とはいかなる者に対して与えられるべき名称であるのか、かつまたその名称で呼ばれるものが現世(特にイスラーム教宗教共同体)の中でいかなる aḥkām (地位)を得るべきなのか、あるいは来世でどのような地位を持つべきかということについての議論から出てきた神学上の問題である。現世の問題として、これは日常的でかつ政治的な性格を帯びた議論であるが、同時に信仰の本質論へと発展していく性格を持っていた。アッバース朝時代になって 'ilm al-kalām (神学)が本格的に成立してくるころには、この問題は純粋に信仰論として大きく成長していった。著者は、そのため特に信仰の本質論という見地からこの問題を見てゆこうとする。そして、imān (信仰)ということがハーリジ派、カダル派、ムウタジラ派、ハナフィー・マートゥリーディ派、アシュアリー派等においてはいかに理解されていたかということを詳説し、さらに、imān (信仰)と islām (帰依)の相互関係と、その関係把握に関する各派の相異について述べ、さらに mu'min (信者)、kâfir (不信者)、

fasiq (罪人), munāfiq (偽善者) 等がウンマ (イスラーム教宗教共同体) の中でいかに取り扱われるべきか、また来世で彼等がそれぞれ占める ahkām (地位) がどのようなものであるべきかについての各派の見解を記述し、終りに著者はキリスト教における信仰論とイスラーム教におけるそれとを比較する。著者はイスラーム教における信仰論は、信仰を支える行為が伴っているか否か、すなわち宗教法に明確に規定されている諸行為が実践されているか否かという観点から信仰の本質を考えていくのが基本的傾向であるとし、それに対しキリスト教においては信仰論は神に対する愛があるか否かという問題を基本にして展開されるとする。もっとも著者が一方で指摘しているように、正統派イスラーム教史上最高の思想家であるところのアル・ガザーリーの信仰論では神への愛がその大きな要素をしめてはいるが、一般的にはイブン・タイミヤにおけるように、神と被造物を絶対的断絶の関係においてとらえるイスラーム教では神そのものに対する愛という考え方は否定される。

第五部においては、imāma (イスラーム宗教共同体の最高権力) の問題に触れている。この問題は宗教的であると同時に政治的なものであって、イスラーム法学の中心問題でもあり得る。著者は、imām (教主) というものがカトリックにおける法王とはまったくちがったもので、この問題に関してはキリスト教における問題と比較することはできないとしている。そして初代四カリフの適否についての神学各派の見解を紹介し、次いで imāma の設立がムスリム共同体にとって義務的であるかという問題、imām になろうとするものが満さねばならない条件をいかにして決定するのか、いかなる経過でその者が imām に選ばれねばならぬか、というような問題についての各派の意見を記す。一般的に正統派イスラーム神学では imām の問題はそれ程重要なものとして扱はれず、むしろシーア派の神学にとってその重要な基礎となっているものである。それは、シーア派の理論では予言と同じく imāma は神の luṭf wājib (必然的恩寵) で予言者をつかわすのと同じく imām をつかわすことは神にとっての義務であると考えられるからである。というのは、人間はそのまま放置しておかれてはまったく善を行う能力がないと考えられ、したがって神は神聖法を人類に付与し、彼等の上に看視人としてばかりでなく、神聖法の解説者でもある不可謬の imām を作って人

類に幸福と救済をあたえねばならぬとシーア派では考えていたからである。このように imām は宗教共同体の長として、その共同体を誤らぬように導びかねばならぬものであり、その意味で哲学的問題としての善・悪と常にかかわりを持つものである。著者はそうした点を明かにしつつ最後に、ザイド派、イマーム派、イスマーイール派等の所謂シーア派におけるそれぞれの imām の意味を記している。この imām の問題はナシール・ウッディーン・アットゥーシーの哲学の影響下に、特にイスマーイール派では独特な歴史哲学と世界観を形成する重要な要素になるのであるが、著者はその点については余り詳しく解明していないのが心残りである。

以上のように本書を概観してみると、シーア派の神学に関する記述が不十分であるとはいえ、非常に豊富な資料をそれぞれ五つの重要問題について集め、極めて実証的にこれ等の問題の性格を解明していこうとする著者の態度がうかがわれる。イスラーム教における神と人間の関係の把握のしかたは、抽象的にいえば、L. Massignon の *Un abîme nous sépare de Dieu (Le salut de l'Islam)* と言う表現が的を射たものであろうが、こうした超越的な神が、これ等五つの問題点を通じて具体的にはいかに人間に関係しているのかを著者は明らかにし、それによってイスラーム教の基本的発想を明らかにしようとしていると思われる。その意味においても、本書は従来の単なるイスラーム思想史の類と異なり非常に意義のある作品であると評価しうるであろう。